

# さといも

サトイモ科：インド・熱帯アジア

## 栽培暦

月 旬	3			4			5			6			7			8			9			10			11		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業	露地栽培																										
早掘り栽培																											
○ 催芽   ● 定植   △ 不織布除去   × 追肥・培土   ■ 収穫																											

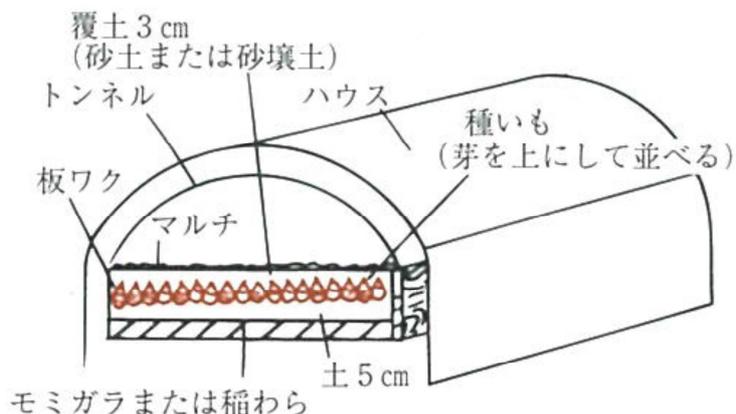
### ■栽培のポイント

1. 連作障害に弱い作物のため、3～4年の輪作を行う。
2. 乾燥に弱く、収量、品質に大きな影響を与えるため、干ばつ時にはかん水を行い、土壌水分を適湿に保つ。
3. 種いもの大小と覆土の多少が、生育を左右するため、種いもの大きさは揃え、覆土は十分に行う。

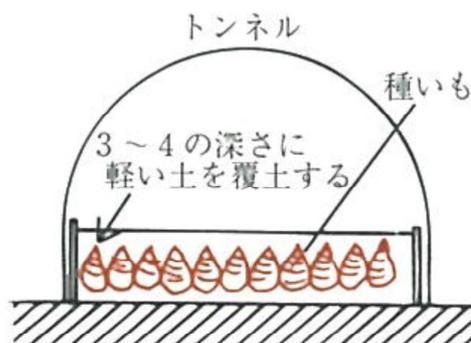
■品種・種子量 石川早生、土垂。種いものは1個50g程度のものをa当り17kg。

■催芽 パイプハウス内または日当りの良い所に、催芽床を作り、露地栽培で4月下旬、早掘り栽培で3月下旬に、種いものを伏せ込む。水分が多すぎると根が伸びすぎ、植え付け時の植え傷みがひどくなるので、かん水は少な目とし、芽だけ伸ばすようにする。日中の温度は25～27℃にし、夜間は保温マットやこもをかけて保温する。

### トンネル保温催芽床



### 冷床催芽床

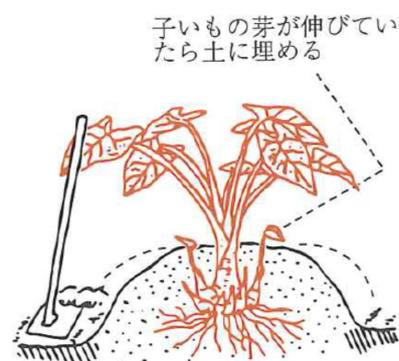


## 施肥例

(a 当り)

## 培土法

肥料名	基肥	追肥	備考
堆肥	400kg	—kg	成分量
苦土石灰	10	—	窒素 2.2kg
ポリポス S 666 P	10	—	リン酸 2.0
磷硝安加里 S 604	—	4	加里 2.2



苗を購入すれば催芽の手間を省くことができる。

- 定植準備 耐湿性は高いが、乾燥に弱いので、保水力のある畑を選ぶ。完熟堆肥を施用し耕起し、肥料は基肥で窒素、リン酸、加里とも 1.5 kg/a 程度を植え付け 15 日前に散布し、耕うんする。早掘り栽培では、うね立て後透明ポリマルチを行い、地温を高めておく。

### ■定植

**栽植密度** 露地栽培は、うね幅 80~90 cm、株間 40 cm。早掘り栽培では、うね幅 100 cm、株間 30 cm とする。高うね無培土で栽培する場合は、うね幅 110~130cm、ベット幅 70cm、高さ 30cm のかまぼこ状のうねを立て、株間 30cm とする。

**植え付け** 植え付けは露地栽培で晩霜の心配がない限り早く植える。早掘り栽培では 5 月上旬に行い、不織布（パスライトなど）をかけ保温を図る。

**植え付けの深さ** 露地栽培では 5~6 cm 覆土し、植え付け後のうね高は平うねか若干高め位で良い。早掘り栽培では 15 cm 程度に植え付ける。高うね無培土で栽培する場合は、深さ 15~20cm に植え付ける。

### ■本畑の管理

**土寄せ** 子いもの肥大をはかり、品質を高めるために、適期の土寄せは重要な作業である。早掘り栽培の場合、マルチを除去し、両側から十分に対着背する。土寄せは追肥と同時に行う。

**かん水** 土壌の乾燥には著しく弱いので、梅雨前及び梅雨明け後の乾燥時にはうね間にかん水する。夕方かん水して朝に水がひいている状態が良い。

- 病虫害防除 乾腐病、軟腐病は連作すると多発するので、連作を避け輪作を行う。また、種いもは無病畑からの健全なものを用いる。汚斑病は、生育初期過繁茂で後期から肥切れをおこした場合に多発するので、施肥に注意する。アブラムシ類、ハスモンヨトウは発生初期に防除する。

### ■収穫・収量

**収穫期** 9 月中旬~11 月上旬。

**収量** a 当り 200~250 kg。